

書評

田中登
横井孝

編『源氏物語 古筆の世界』

今西 祐一郎

二〇〇九年十一月、筆者は実践女子大学文芸資料研究所主催の「源氏物語の古筆切」というシンポジウムにおいて「古筆嫌い」という題で発表し、失笑を誘った。もとより「嫌い」ということにまっとうな理由があるわけではなく、いくら古いものとはいえ、一枚の紙切れに万金を投ずることをためらう筆者の吝嗇、貧乏性による。

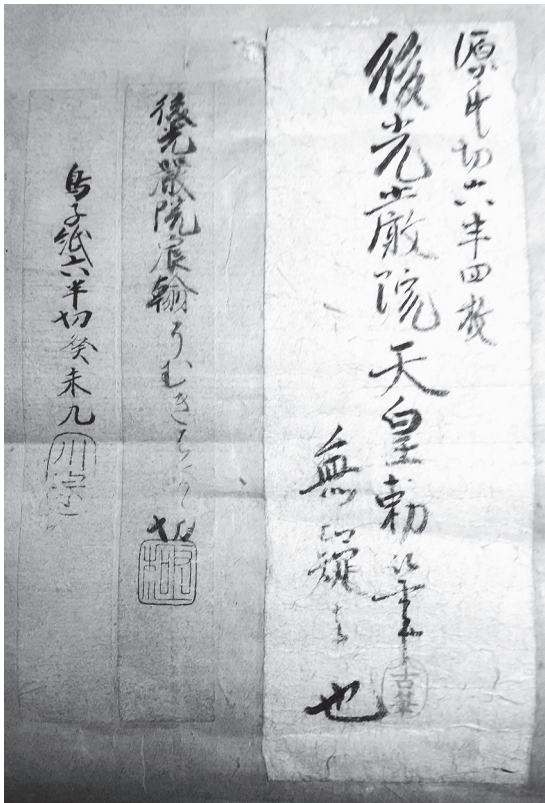
ところが、その後、筆者にとっては珍しくやや高価な古書を購入した際、その古書店がおまけに『源氏物語』古筆の一軸を付けてくれた。それは裏に「後光厳院天皇勅筆」（次頁図）と記された一幅である。一幅といっても、それは通常の切一葉の軸ではなく、上下二段四葉の、古筆軸物としては変則的な仕立てである。そして、上段二葉、下段二葉はそれぞれ一紙であり、粘葉装の一紙二面を相矧ぎして裏表そのままを軸装にしたのであろう。それは一般にいう「切」というより、『源氏物語』古写本の零葉一枚の裏表の軸というべきものか。

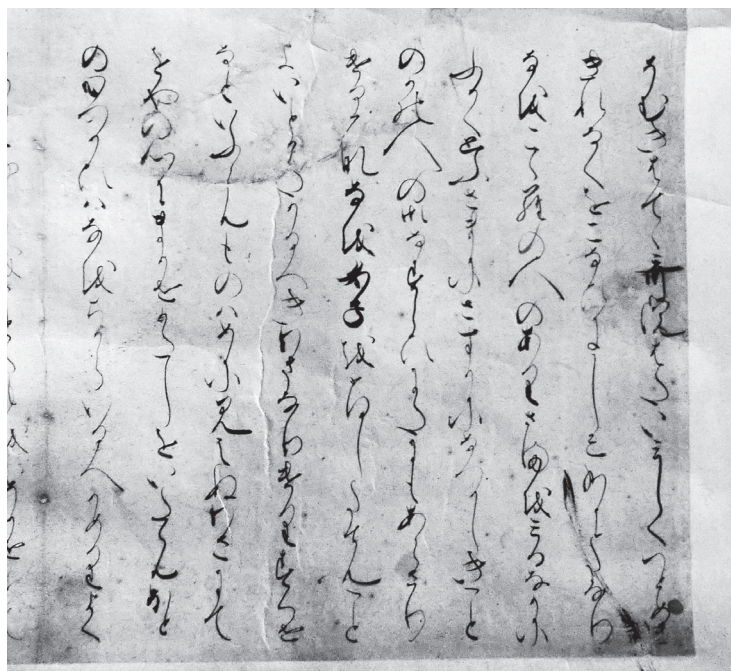
調べたところ中身は若菜下巻で、素人目にも室町時代以前の筆とわかる。しかし古筆に冷淡な筆者はそれ以上構うことなく、部屋の壁の汚れ隠しに掛けたままにしておいたのである。入手以来十年を越え、それは仕事机の傍らの壁

に掛けられたまま、絶えず棚引く煙草の煙に燻べられて、当初よりずいぶん古色がついたような気がする。

昨秋、二〇〇九年のシンポジウムを企画開催した横井孝、そしてそのシンポジウムにもパネラーとして参加された田中登両氏によって『源氏物語 古筆の世界』という大著が刊行された。平成一二年に刊行された久曾神昇氏の『源氏物語断簡集成』（汲古書院刊）を大幅に上回る五百点近い『源氏物語』関係の古筆切大集成である。かつてのシンポジウムでのご縁から、横井、田中、上野英子三氏より本書の恵投を忝くした。

披いてみると「後光厳天皇」の切が十二点も掲載されている。「古筆嫌い」の筆者もさすがに心動いて、壁掛けの「後光厳院宸筆」と見比べて見た。と、その中に素人目には壁掛け切のツレと思われるものがあった。本書所収「10」「六半切（朝顔）」と「15」「六半切（若菜下）」で、一面十行、寸法もほぼ同じである。特に「15」は、同じ若菜下巻の切であり、心なしか一段と壁掛け切に酷似しているように見えた。論より証拠、書評という本稿の趣旨から逸脱して、載せて諸賢の鑑定を仰ぎたい。

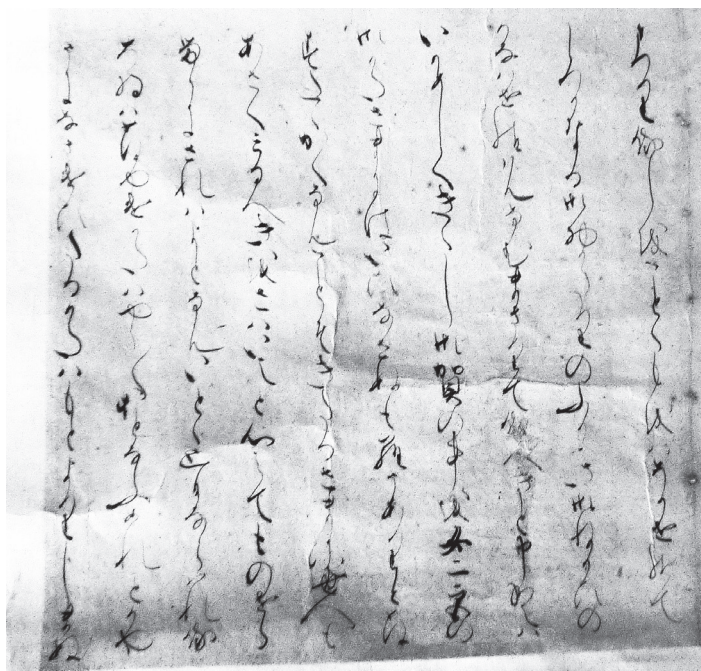




上段右

若菜下・1205⑧〜⑫

そむきはて、斎院はたいみしくつとめてま
 されなくをこなひにしみ給にたなり
 なをこゝらの人のありさまをみるなかに
 ふかく思ふさまにさすかなつかしきこと
 のかの人の御なすらひにたにもあらさり
 けるかななを女子を、ほしたてんこと
 よいとかたかるへきわさなりけりすくせ
 なといふらんものはめに見えぬわさにて
 をやの心にまかせかたしをいたゝんほと
 の心つかひはなをちからいるへかめりよく



上段左 同・1215①〜⑦

まつり侍しをこと、もをはそかせ給て

しつかなる御ものかたりのふかき御ねかひの

かなはせ給はんむまさりて侍へきと申給えは

いかめしくき、し御賀の事を女二宮の

御かたさまにはいひなさぬもらうありとおほ

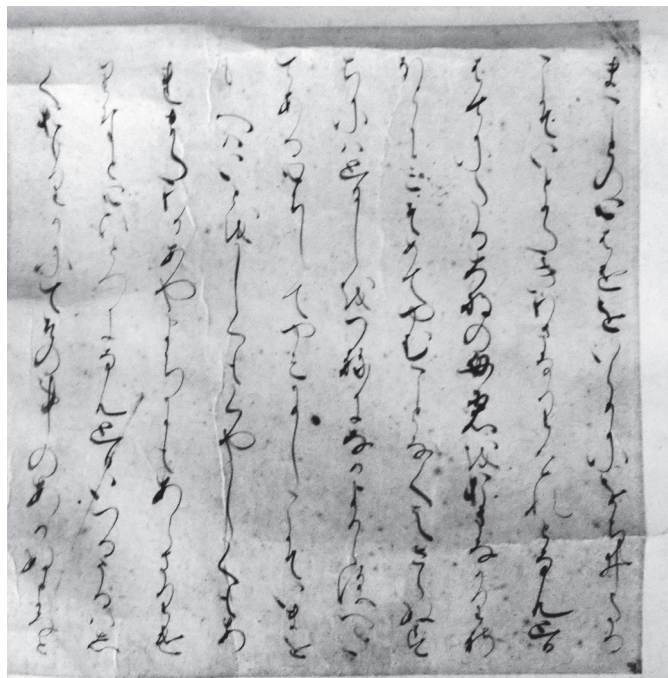
すた、かくなんことそきたるさまに世人も

あさくみるへきをさはいえと心えてものせら

る、にされはよとなんいと、思ひならはれ侍

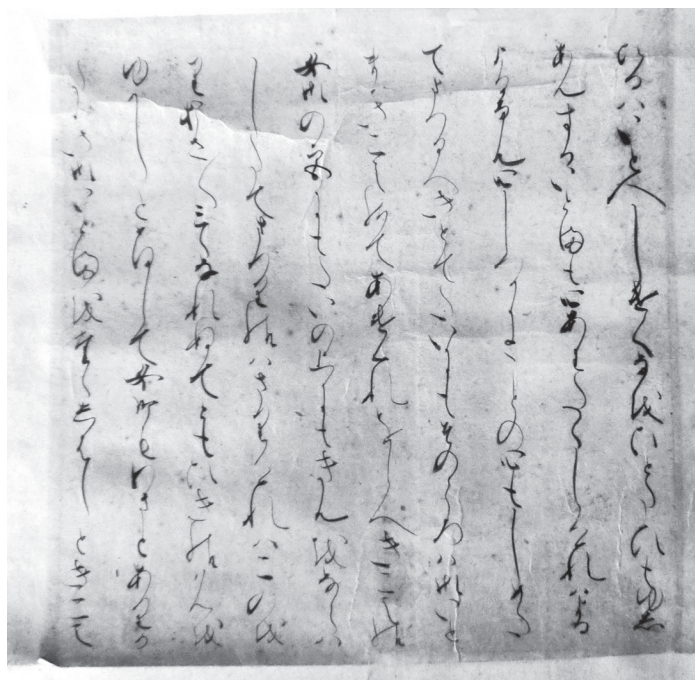
大將はおほやけかたはやうくおとなふめれとかや

うになさけひたるかたはもとよりしまぬ



下段右 1165⑨～1161①

まことの心はせをいらかにをちぬたる
 こそいとかたきわさなりけれとなん思ひ
 はてにたる大将の母君をおさなかりし
 ほとにみそめてやむことなくえさらぬす
 ちには思ひしをつねになかよからすへた
 てある心ちしてやみにしこそいまを
 もへはいとをしくもやくしくもあ
 れまたわかあやまちにもあらさりけ
 りなと心ひとつになん思ひいつるうるはし
 くおもりにてその事のあかぬよなと



下段左 1145 ⑭ ~ 1146 ⑤

ひるはいと人しけくなをひとたひもゆし
 あんするいとまも心あはた、しければよる
 よるなん心しつかにことの心もしめた
 てまつるへきとてたいにもそのころは御いと
 まきこえ給てあけくれをしへきこえ給
 女御の宮にもたいの上にもきんをならは
 したてまつり給はさりければこのを
 りおさくみ、なれぬてもひき給はんを
 ゆかしとおほして女御もわさとありか
 たき御いとまをた、しはしときこえ

さて、本書の書評といっても、古筆研究者、愛好者ではない筆者は、『源氏物語』研究者としての所見を述べることはできない。

そもそも古筆切といえ、茶掛けにふさわしい和歌切が本来であり、物語切は軸にしたり鑑賞したりするものではなかった。しかし、近時、古筆愛好家ではなく研究者によつて、これまで古筆鑑賞の主要対象ではなかった物語切が、国文学における物語の散逸本文の復元資料、あるいは多岐にわたる『源氏物語』本文の資料として取り上げられるようになった。『源氏物語』に関して、その集成の第一歩となつたのは、前記久曾神氏の『断簡集成』である。

それに次ぐ本書の、研究者にとつての大いなる福音は、それぞれの切が示す『源氏物語』本文に『源氏物語大成』校異篇での所在が示されたことである。これは、誰の筆か、筆跡の善し悪し、さては料紙の美などを重視する古筆愛好家にとつてはあまり重要なことではないかもしれない。先行する久曾神氏の『源氏物語断簡集成』にも、その表示はなかった。

『源氏物語』の古筆切で、定家本以外・以前の本文を示すものの少なくないことは、認められている。本書に『大成』校異篇の頁・行数が表示されることによつて、『源氏物語』の本文研究にとつて、それら『大成』校異篇採用の本文以外の古写本文を、断片とはいへ容易に参照できるようになったことの効用は大きい。

その上でさらに、古筆鑑賞を度外視した要望を記したい。それは『源氏物語』の古筆切を、『源氏物語』の巻別、本文順に配列することである。

古筆を扱う書物では、切の紹介は（伝承）筆者ごとに纏めて示するのが基本であろう。本書においても（伝承）筆者ごとに整然と並べられている。しかし、『源氏物語』本文研究の資料としては、そのような配列はかえつてもどかしい。桐壺から夢浮橋まで、巻順に並べられていたら、どんなに便利であろうか。これからも出現するであろう源氏切を収録して、巻順配列の本書続編の刊行を期待したい。

また、収録内容については、いわゆる古筆切としての極めを持たないような断簡、零葉をも収録すれば、『源氏物語』本文研究に対する寄与は一段と増すであろう。さらに最近、横井孝氏が紹介した実践女子大学蔵「為家筆 幻卷」（文芸資料研究所「年報」四一号）、〈春曙文庫蔵源氏物語断簡（帚木・藤裏葉・橋姫・宿木・手習）翻刻と解題〉として「詞林」七四号に掲載された田中重太郎氏旧蔵の鎌倉時代写本断簡、あるいは国文学研究資料館所蔵の橋本進吉旧蔵、伝為家筆若紫（一部欠）、絵合（断簡）、松風、藤袴の四冊、またかつて日本古典文学会から複製の刊行された中山本の数巻など、そのような古写零本、断簡が比較一覽できれば、どんなにありがたいことだろう。

とはいえ、そこまで対象を広げると、同じ箇所や同じ巻の古写零本を相手に、冊子による一覽という古来の形態では無理であろう。まずは源氏物語切を本書の倍の千点ほどに増やした本書の続編として、巻順配列の「源氏物語古筆切集成」の製作を望みたい。

それから先、古写零本等、古筆切の範疇からはみ出すような膨大な資料については、昨今、様々な分野でもて囃され、国文学研究資料館の大規模プロジェクトにおいても目標に据えられている「課題解決型」なんとやらに便乗して、デジタル技術による次世代の『校異源氏物語』の取り組みを期待したい。デジタルレベルでも、たんに個別資料の画像が見られるという段階は（それは基本であり、いまだその効用は小さくないとしても）、すでに時代遅れである。集積する多様な古写「源氏物語」資料を、AIの駆使によって自由自在に操れる媒体の構築こそ、二十世紀の『源氏物語』研究の金字塔『校異源氏物語』の学恩に報いる道であろう。それがどんな形になるかは、昭和世代の筆者には想像もつかないのであるが。

付記

本稿執筆前に、本書の編者田中登氏の訃報に接した。たんなる古筆愛好家ではなく、国文学研究における古筆の活用をご自身蒐集の資料を駆使して実践してこられた類い希な業績を偲び、謹んでご冥福をお祈りする。

（九州大学名誉教授）